

GRAZIE

“グラッツェ”

“グラッツェ”とはイタリア語で“ありがとう”の意味。陽気なラテン民族の言葉に倣って、素直に感謝の言葉を口にできる明るい場作りを、本学科は心がけています。



海外に行かない 国内フィールドワーク!?

ソレって
いったい
ナニ



学科の名称は“国際コミュニケーション学科”。

「なら、海外に行くことが勉強に直結しているんでしょ？」
いやいや、これがそうばかりではないのです。国内にいたって、海外とのコミュニケーションは十分学べる。そんなコンセプトで、学科では国内で学べる、そして単位が取得できるフィールドワークが用意されています。2014年は、【サマースクール】と【映像翻訳】二つの講座が開講しました。「海外に行かずとも、国内でそれに近い体験を！」

高校生のみなさん、
国際コミュニケーション学科に集まれ～!

01

サマースクール

Summer School

どんなフィールドワークなの?

毎年、明星大学で夏の風物詩ともなっているサマースクールは、明星大学の学生が中心となり、海外からやってくる国際ボランティアたちとともに、近隣の子どもたちに英語・中国語を教えるというプログラム。

2014年は大学創立50年ということもあり、募集人数も例年より多く、大変な大所帯となって盛り上がりました。その数、学生130名、近隣の小学生200名。そして海外から日本に来てくれた国際ボランティアが約20名。集った参加者の国籍にいたっては、カナダ、英国、ハンガリー、ウクライナ、台湾、メキシコなどほぼ全大陸をカバーするメンバーが揃いました。

誰を対象に行われているの?

参加してくるのは、主に近隣の子どもたち。毎年の恒例行事になっているので、例年心待ちにしている子どもたちが数多くいます。

その人気の秘密は……。

1. いわゆる「お勉強」ではなく、「遊び感覚」で英語が覚えられる。
2. 1チームを年齢で区切ることはせず、小1から小5までなどが一緒になるため、年齢幅を超えた縦断的なコミュニケーションがうまれる。
3. サマースクールに来れば、自分が行かなくても世界各国20カ国以上の文化に触れることができる。

テレビで取り上げられた影響もあり、今年



で12年目を迎えたサマースクールは、地域の夏の風物詩。小学生の頃サマースクールで学んだ女の子が、大きくなって大学に入学、今度は教える側として活躍するなど、学科にとってうれしい現象が起きています。

人間ドラマが紡がれる、感動の卒業式

プログラムは一週間かけて行われるのですが、最終日には卒業式があります。

この日ばかりは親御さんたちも参列可。英語にまったく縁がなかった我が子が、チーム毎の発表で、英語で自己紹介をしているシーンに、親御さんたちも思わず微笑みながら、カメラをぱちり。

たとえそれがたどたどしくても、一生懸命、学生&国際ボランティアに助けられながら頑張っている姿に、学科の教職員もじーンと感じ入るものがあります。頑張ったのは子どもたちだけではありません。普段生の英語に触れる機会が少ない学生も同じ。

「英語しか分からない国際ボランティアが、用事があって学科の1年生に話しかけようとするも、1年生の方は英語で何をどうしゃべっていいのかわからないので、とりあえず『ノーサンキュー!』。そしてこれは無視されているのでは?と勘違いした海外ボランティアが涙を流し、それを知った1年生がまた自分のもどかしさに泣けてしまったなんていうエピソードもありましたね。笑」

さすがは遊び感覚で英語をというコンセプトのサマースクール。



式ではジャグリングや縄跳び、ダンスまで飛び出し「遊び感覚で英語を」というコンセプト通り、会場が割れんばかりの大賑わいになりました。

最後に、子どもたちはお世話になったお兄さんお姉さんたちから表彰状を授与。

「来年まで僕を覚えていてよ」という子どもの声も聞こえ、子どももウレシイ、学生もウレシイ、海外ボランティアもウレシイ→全員がwin-win-winになるイベントは、たくさんの拍手とともに、幕を閉じました。

学生の声

サマースクールを企画運営した3年生がこんなことを言っていました。

「これだけのイベントを動かすとすると、すべてが一筋縄ではいかず、やってる最中に何度も二度とやるもんかという壁が出てくるものです。でもこうして終わるとまたやりたくなっちゃうのが、サマースクールの妙。今年の失敗をまた来年にいかすぞ、と、スイッチ入っちゃうんですよねえ」

『自らがやる』体験。生々しく、実用的で、とてつもない重みを持った体験は、どうやら中毒になる模様(笑)。国籍もバラバラ、世代はもっとバラバラ、そんな中で培われる、お金を払っても買えない濃い体験は、学生を一回り大人にさせてくれます。

02

映像翻訳

Visualmedia Translation

どんなフィールドワークなの?

一言で言うなら、「あなたが映画の翻訳者になりましょう」という授業。2014年からフィールドワークの新しいラインアップとして加わりました。

とある映画にこんなシーンが出てきたとします。典型的な日本の4人家族が食卓を囲んでいます。そこでお父さんがまず言います。「いただきます!(Let's eat!)←英語字幕」



次にお父さんの言葉を聞いたお母さんと子どもたちが言いました。

「いただきます!(Thanks for the food!)←英語字幕」

最初のお父さんの『いただきます』は、Let's eat(直訳: さあ食べよう)なのに、お母さんと子どもたちの『いただきます』は、なんでThanks for the food(直訳: 食べ物に感謝)なのでしょう?



そこにはものすごく面白い意味が含まれている、それを紐解くのがこの「映像翻訳フィールドワーク」の授業です。

指導教員は?

指導を請け持つのは「日本映像翻訳アカデミー」を主宰している新築直樹先生。広告企画、雑誌編集を経て「編集の学校」の運営に携わった後、1996年にまだ映像翻訳という

職業ジャンルもはっきりセグメントされていなかった時代に「日本映像翻訳アカデミー」を設立。

生徒さんに翻訳の世界を伝える傍ら、卒業生の仕事の獲得にも奔走し、現在はフォックス・チャンネルやナショナルジオグラフィックチャンネル、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) が主催する『難民映画祭』の映像翻訳を卒業生と一緒にやっている、現役の仕事人。ゆえ、この授業には、新楽先生の社会でのリアルな経験がしっかり反映されています。

実際の授業の光景は？

バベルという映像翻訳ソフトが入ったパソコンが、一人一台用意されています。そこに各人が事前に課題でやってきた翻訳文を入れると……。

「うわあ！」

パソコンルームのあちこちから歓声が聞こえました。それもそのはず、自分が一生懸命考えた文章(和文)がそのまま映画の字幕に

なっているのですから。そこからは、チームになっての作業。

映像翻訳は“ニュアンス”の世界なので、ある意味“答えのない”世界。1年生から4年生までが交じり合い、数人が1チームになって作業を開始。

新楽先生はこう言います。

「みんなで話し合っ、試行錯誤しながら最善の答えを見つけていく。それが、答えのない世界の答えの出し方なんです」

そこにわらわらと新楽先生が主宰するアカデミーから出張してきた現役プロ翻訳家の人たちも加わり、ニュアンス、表現、語彙について、喧々囂々の楽しいディスカッションが始まります。それが終わるとその場で、チーム毎にそれぞれの翻訳を映画で発表。

どのニュアンスが一番映像とぴったりきているか、どの文言にするともっと表現力が上がるのかなどを、プロの先生の解説を聞きながら、その場で一つ一つ検証していく、この時間がまた、なるほど！という発見の連続。

学生の声

「教科書を読む授業の何倍もこの授業はやる気を感化されます」

「単純に、自分の力がその場で結実し、映画という形になって見えるのは、本当におもしろすぎです。これぞオリジナルの教材ですよ」

「チームでどっちの翻訳がいいかっていうゲーム性もあるから、退屈なんてまったくしませんよ」

この授業、集大成として国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) 主催で公開される映画の字幕翻訳まで手がけるのだそうです。これはもう、やりがいがあるどころの騒ぎではありません(笑)。
学生の能力を信頼して任される大役。そのチャンスを授業で与えてもらえるのですから、逆に講義を受ける方がその面白さに引きずり込まれていきます。

これからも学科では、『やって楽しい』『経験してスキルアップできる』『実践を皮膚感覚で学べる』国内版フィールドワークのラインナップを充実させていきたいと思います。学生という宝の時間を、国際コミュニケーション学科でぜひ一緒に、有意義に過ごしていけるなら、幸いです。

『D0をカタチにデキル人』 そして生まれる、こんな先輩、あんな先輩……

国内外問わず、いろんな実践型フィールドワークに力を入れている学科。その特色を象徴するような先輩が、学科を礎に、すくすくと成長中。「どんな人がいるの?」「またはどんな道を歩んでいるの?」というわけで、今日は二人の先輩をご紹介します。



武富 拓也さん

沖縄出身の武富拓也さんは、24歳の現在3年生。「いろいろ途中まわり道をしましたが、おかげで今は毎日ハッピーです」

迷宮入り

入学当初は教職を希望していた。「でも実際授業を受けていろいろやってみたら、なんか違う、おれは“人に何かを教える”タイプじゃない、と。“人と一緒に何かを生

み出し運営する”方が向いていると感じ、大学内で転部するか、大前研一さんのBBT大学に入り直すか、相当考えました。まさにそこがまわり道への入り口だったんですけれど(笑)」

武富さんは高校を卒業した後、自分の歩く道を見失い、家にこもった。明星大学に入学するも、たった半年で休学。

迷宮を抜け出し、実践へ

「毎日、真っ暗で、退学しようとも考えていました。でも動かないとダメになると感じ、新宿の歌舞伎町のコンビニで夜間、一日11時間、働き始めました。そこでいろんなものを見ました。キャバ嬢や夜の労働者たち……。彼らが反面教師となり、大学生というごくフツートのポジションのありがたさが嫌というほどよく分かったんです。で、もう一回元の道に戻ってみよう、と」

同級生が2年生に進級した時、武富さんは一人で1年生の勉強を始めた。もう、極端な世界はさんざん見たのだから、道に迷うことはなかった。

まずは学科主催の中国留学(半期)に参加。奨学金の申請も出し、夏はサマースクールに熱中。星友祭(大学の文化祭)にも加わり、明星大学の50周年企画では100人を束ねるリーダーとして、300名のお客さんを集め、イベントを大成功させた。その後は、日本語



教師のアシスタントとして、タイのテクノロジーカレッジに長期留学。

「この学科に入って良かったと思うのは、とにかく“チャンスが常に与えられていること”これに尽きます。短期の海外体験、留学はもとより、日本語教師として働けるチャンスなんて、他大学じゃそうあることじゃありませんから。体験型の授業が多いのも、教科書外のことを皮膚感覚で学ぶ絶好の機会。それが僕にとっては本当に刺激的で、そんな環境が自分の歩く道を照らし出してくれた気がします」



保要 佳江さん

保要さんは、学科を5年前に卒業したOG。現在は山梨県で、古民家宿の経営をしている。
<https://www.facebook.com/LuChuanpurasu>

きっかけ

「大学生の時に一年休学して、学科のフィールドワークでお世話になった農業研修施設(アジア学院)でのボランティアに取り組みました。今思えば、それが“村おこし”に目覚めたきっかけかな……」

保要さんは、自分の生まれ育った故郷を再生する活動に取り組み、『芦川ぶらす』を設立して、兜作りの築100年の古民家をセルフリノベで宿に改装するプロジェクトを行っている。

高校生まで、山梨県笛吹市芦川町の人口400人の限界集落で育った。「昔は早く抜け出たくてしょうがなかったんです」

だから迷う事なく東京の明星大学に進学、

懸命にやっていたら、扉は自動的に拓いていく

バイトだけに没頭していた時は“お金は持っていたのに楽しくなかった”。けれど見方を変えれば、“仕事内容にこだわらなければ、お金は稼げるんだ”という自信になったんだそう。ならばもうワンランク上、目的に向かって今できることをすればいい。

「今を一生懸命やっていたら扉は自動的に開いていく気がするんです。人間は時間が無駄にあると余計なことを考えちゃう。だから時間は有効に使おう。そしてせつかく生きてるんだから、面白いこと、したいじゃないですか」



学科のフィールドワークにも積極的に参加し、在学中にはアイルランドの大学にも長期留学した。

大学時代、保要さんの担当教員だった毛利先生は、当時をこう回想した。

「入学したての頃は、私の研究室に一人で来ることができなかったくらい恥ずかしがりやでね。けれど、それに少し変化が見られたのは、学科の提携校へ長期留学に出てから。自信がついたのか、何事にも積極的に取り組むスイッチが気に入ったように見えました」

足下を変えるのは、自分だ

その頃、保要さんは都会での学生生活を通して、自身に変化を感じていた。

「憧れた東京生活でしたが、あまりにもせわしなさすぎて、ふと我に帰ったら、芦川に遊びに来ていました。その時に古民家の格好よさに、心を逆に鷲掴みにされたんですね」

「アジア学院にいた時のこと。私が『国際協力を目指している』と話をしたところ、そこに

自分が自ら先頭にたって、ヤル

何かをする時には、まず、自分が旗を握る。そこから道が拓ける、と。

イベントならば、学内に呼びかけてPVを制作。かつての“積極的ひきこもり青年”は今のリーダー。現在はまっているのは、少子高齢化で過疎化が進む地元住宅団地の活性化につながる企画を考えること。

大学生活最後の年となった今年。武富さんは最後の学生生活を謳歌するかのよう、今日も忙しそうにあちこちを駆け回っている。

いた人に『日本を変えられない人が世界を変えることはできない』と言われたんです。私の出身地は限界集落。故郷はこのまあいけば消滅する。ならばその再生を自分がやろう、と」

大学5年生で卒業した後は、農業のベンチャー企業に就職。4年間の仕事経験の後、故郷の古民家を宿にするプロジェクトを立ち上げた。

「私が目指しているのは、都会も田舎もあるデュアルライフ。“都心”と“郊外”を往復することで田舎に経済が生まれ、人の流れもできる。完全移住しなくても、いいところ取りをすればいいじゃないかって」

毎日が試行錯誤

セルフリノベに必要な資金は、クラウドファンディングで募った。

毎日汗水たらして自分と仲間たちの手で古民家を改装、宿をオープン。先に紹介した武富さんも、大掃除に駆けつけました。そのお祝いで久しぶりに再会した毛利先生は目を細める。

「彼女のような人材が学科から出てくれたことは、私たちもうれしい限りなんです。これからは学科から第二第三の保要さんが出てくれるといいな」

山梨県の情報誌にも取り上げられた保要さん。「私にはDOしかないんで(笑)」

と笑う保要さんは、周りがついていきたくなるようなカリスマ性を帯びていた。

『DOの精神』こそ、学科のフィールドワークが伝えたい精神。それをほんの少しでもいいから、学科のフィールドワークを通してお手伝いできるなら、私たち国際コミュニケーション学科は大変誇りに思います。

Wanted

学生編集スタッフ募集中!

将来マスコミの仕事をしたい人、またはイラストなどで自己表現をしたい人、記事を書きたい人など常時募集中。企画段階から実際に形にしていくまで、全てを自分で体験できるので、とてもやりがいがありますよ。積極的な参加をお待ちしています。

これは是非載せて欲しい!の記事&情報大募集

“GRAZIE”は、学生のみなさんと作っていくメディアです。より充実した内容にしていけるために、どんな些細なことでもネタをお待ちしています。

【応募先】〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1明星大学国際コミュニケーション学科
 Tel 042-591-5329またはinfo-com@eleal.meisei-u.ac.jpまで

【編集スタッフの眩き】

いろんなニュースが飛び交った2月。学科はハーフの学生も多いので、国際ニュースも身近に感じる。政治的なニュースの傍らでいつも想像を馳せるのは、そこに暮らす普通の人々のこと。日本で何の変哲もない生活ができるってことがなんと贅沢なことか。感謝です。■Y